



書留

文久三年七月至十月

之
二
三
七
一
八

服部文庫
イ 17
2189
12

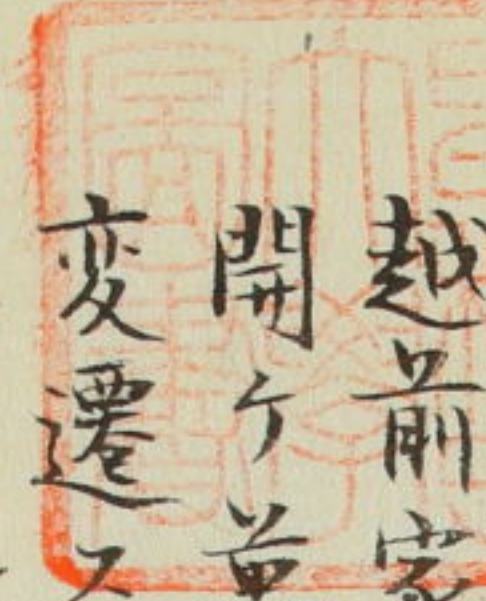


117 特
2189
12

文久癸亥 八月 七月未少之文
春嶽公書八時果評

服部文庫
117
1289
7033

一 松平春嶽所存書



越前家一定之論ト申ハ方今洋夷之形勢古ト異リ大ニ
 開ケ萬國通信ヲ結フ之時節吾日本ノ孤立スルハ天道
 変遷スル理ヲ不知信ヲ宇内ニ失ヒ 皇國ノ耻辱是ヨリ
 大ニナルハナニ是以鎖國攘夷ノ理決而無キ處ナリ且彼ハ
 強大ノ五大洲假令 皇國一般攘夷一致ニ至ルトモ敢而
 當ルヘカラスノ大敵ナリ 皇國未タ一致ノ見込無之
 既ニ瓦解ノ姿有之其上一旦通信セシ五ヶ國ヲ故無攘夷ス
 ルニ至リ候テハ第一信義難相立只今攘夷ト申者所謂
 彼ヲ知ラサルノ謂ニテ 皇國滅亡ニ及ヘキハ必定航海ハ
 世界変遷ノ理ニ順フ訣ニシテ 皇國モ自ラ富ルニタル
 ヘシ且當時盛ニ攘夷鎖國ト唱候ハ環海ヲ守ル計而已ニテ
 御國威御實張ノ振合決而無之且又京都ニテ只管攘夷御

唱ニ相成候得共弥御勝算御計畧ハ無之事歟ト相聞就
而ハ是非航海ニ無之テハ難相成全躰西洋ヲ邪宗ト唱ヘ
候類古ノ切支丹トハ異ナリ随分取用テモ弊害ヲ可生
宗旨トモ不承然ニ是等ハ制度ノ立方ニ寄事ニテ此方人民
彼等ニ押染リ候ハ畢竟此方ノ政道彼ニ不及ヨリノ義ニ可
有之就テハ能ク其考ノ上所置スヘキ事ニ有之故ニ越前家
家一定ノ論ト申ハ是迄幕吏航海ノ説トハ大ニ異リ彼五ヶ
國ト立並ニテ大軍艦數千艘調ヘ環海出散重ニ其立場ヲ
設ケ此方ヨリ熾ニ航海シ 皇國有用ノ品ヲ彼ニ與ヘ
ス不用ヲ以テ有用ニカヘ或亞目利加ノ器物ヲ英國ニ持越
シ併ニ蘭西ノ產物ヲ以テ魯西亞ニ持渡彼等ニ一入抜出テ
交易スルニ至ル時ハ自然ニ海内富强ノ國ニ至ルヘシ既ニ攻
ルノ勢カヲ以テ環海ヲ固メ御國威益々至強ニ以テ永ク

通信スルニ至ル時ハ萬世絶テ患ナカルヘシ萬一彼ヨリ信ヲ破ラハ
曲彼ニ有忽チ航海其居國ヲ亡滅スルニ至ヘシ尤當今攘夷
ノ訣ト違ヒ五ヶ國一時ニ敵國トナルト決テ無之故ニ彼ヨリ破ル
時ハ一國或二國サスレハ小敵ナレハ破ルニ尤安カルヘシ然ルニ京都
ニテハ斯ル大躰ニ御目ヲ附ラレス只管洋夷ヲ醜ニテ攘夷ニト
唱ヘ禽獸ノ如ク被 思召候得共蛮夷既ニ開ケ仁政ヲ施シ
如今萬國通信ノ為躰古ト同日ノ論ニ非ルト明ニ素ヨリ天地
間ノ人ニ相違無之若シ京都ノ論ノ如クナレハ文王孔子モ夷狄
ト唱フ是ヲ攘フモ可ナラシカ且又幕府洋夷通信ノ義ハ畢
竟恐怖ノ心ヨリ引起リ大ニ其策ヲ誤テ別テ 皇國ノ
御為ナル開航有之理ヲ知ラス故ニカル時節ニモ至リ候ナリ
就テハ作恣 天朝ノ思召モ幕府ノ所置モ共ニ天理ヲ知ラ
ル患ト可申歟苟其患ヲ知テ不諫ハ臣タル者ノ忠ニアラス申

所用係是之有以方官 城下在方之也其書心能後胸
痛其上症後乘其方官 城難任其難此後何向之也

七月廿六

秋月廿九

八月廿四日因防是也秋月廿九日因防是也

内去心也其方官此即少也其方官此即少也

八月廿四日因防是也秋月廿九日因防是也

此及所用有欲之馬其方官此即少也其方官此即少也

其方官此即少也其方官此即少也其方官此即少也

八月廿四日因防是也秋月廿九日因防是也

去廿五日控飛之舟中地及京都而及法事也其方官此即少也

初命以世有也其方官此即少也其方官此即少也

七月廿七

分部美林也

別紙

方今進之不容易也其方官此即少也其方官此即少也

七月

八月廿四日因防是也秋月廿九日因防是也

先通之入印中其方官此即少也其方官此即少也

且下向去月廿七日到其方官此即少也其方官此即少也

其方官此即少也其方官此即少也其方官此即少也

其方官此即少也其方官此即少也其方官此即少也

八月廿九日

伊名控其方官

瑞西合流國特派公使

正七セルニ
アイノホムハルト

其方官此即少也其方官此即少也其方官此即少也

伊予右口取石見情下名右之紙付 奉元下ノ公之根掛付

八日付

連名

杉平紀後中紙

日文文

稲系共中紙

日文文為人得中紙

而并之山下友

河川捕中紙

一月十日珍飛仰書

稲系共中紙 杉平伊予書

領儀候所申取中紙ニ付之其代申書儀候所別紙取付
申下之就言前々御申度申儀候所申下申下申下申下申下
成申其下御申度申下申下申下申下申下申下申下申下
右之紙其代申下申下申下申下申下申下申下申下申下

尤前々御申度申下申下申下申下申下申下申下申下申下
取申其下御申度申下申下申下申下申下申下申下申下申下
持付申書取申下申下申下申下申下申下申下申下申下

一日付

連名

杉平伊予中紙

別紙

尾張前々御申度申下申下申下申下申下申下申下申下申下

領儀候所申取中紙ニ付之其代申書儀候所別紙取付
申下之就言前々御申度申儀候所申下申下申下申下申下
成申其下御申度申下申下申下申下申下申下申下申下申下
右之紙其代申下申下申下申下申下申下申下申下申下

尾法... 別紙... 連名

いりり

稱... 別紙

別紙

大阿...

佐...

大阿... 佐... 別紙

一 加...

前... 別紙... 加...

急... 別紙... 加...

別紙

加...

方... 別紙

但...

七...

右...

一 抄... 別紙

七...

抄...

別紙

別紙通之儀在國に別りて儀取了之儀也
了也

七日甲午

定切 雅典

- 松平相模守及
- 松平院法寺及
- 上杉澤山寺及
- 松平侍所寺及

別紙

海軍中隊之儀及、所用之儀不備、
令及紀如加補揚、
思緒、
友信、
七日

十月末品屋後物之旨

當今各品屋後物、
通海軍中隊之儀及、
海軍中隊之儀及、
所用之儀不備、
令及紀如加補揚、
思緒、
友信、
七日

品屋後物及、
所用之儀不備、
令及紀如加補揚、
思緒、
友信、
七日

八月十日 此信 薩州人 片尾

八月十日 板倉 國防 十 秋 屋

一、本年 冬 終 兵 馬 乃 保 而 此 後 亦 當 中 能 者 之 人 數 出
仰 身 之 方 交 用 意 向 行 仰 祈 在 下 一 段 之 事 亦 此 方 為 幸 也 如
此 亦 有 待 之 言

八月十日

板倉 國防 十

名 列

酒 井 孫 兵 衛

名 列

杉 平 左 衛 門 守 左

八月十日 此信 薩州人 片尾
八月十日 板倉 國防 十 秋 屋
一、本年 冬 終 兵 馬 乃 保 而 此 後 亦 當 中 能 者 之 人 數 出
仰 身 之 方 交 用 意 向 行 仰 祈 在 下 一 段 之 事 亦 此 方 為 幸 也 如
此 亦 有 待 之 言
八月十日
板倉 國防 十
名 列
酒 井 孫 兵 衛
名 列
杉 平 左 衛 門 守 左

八月十日 傳 奏 野 上 守 中 中 秋 下 京 代 處 中 去 日 傳 出 之 別 紙
通 之 信 傳 此 亦 日 中 之 概 也 仰 祈 以 上

別 紙

八月十日 天 保 山 沖 上 英 艦 隊 中 之 事 奉 報 是 打 神 由 神
妙 之 事 也 當 又 不 失 其 際 之 事 據 所 以 事

八月十日

一上校浮舟所居書

私傢進進以出... 禮部之出... 家士風教... 去日用... 亦有信... 此...

八日 廿六

上校浮舟所居

一松平河原所居書

外來攘... 為監... 此...

在... 耳... 之... 昔... 此...

松平河原所居

一戶田兼右所居書

今... 烏丸... 此...

戶田兼右所居

一永井飛浮所居書

八代... 以... 此...

飛澤を中身は後身何ぞい

りりりり

亦并飛澤を中身

後身何ぞい

一 仙石藩政の成り

於東印長所より御川揚慶上人回西往使事より上列紙書り雛形
其右後在事員人数多き同席七員右編其後同席中より左に
戸表五編成り同席より回西家事より上列紙書り雛形向より左に

りりりり

十一日

仙石藩政

別紙

内所所使事より右左列紙書り雛形向より左に
戸表五編成り同席より回西家事より上列紙書り雛形向より左に

りりりり

一 聖堂利加の返書

聖堂利加合元國ニニストル

レニレテント
エキセルレニ
ロハルトアツクブ

英國九月二十日附百三十三号の書翰を以てエーニホット石運方約定の章
調子と儀と誠意院 於九月九日附其牙九十四号の書翰を以て如く
大出出し其後所生取福系を以て其の如く其の如く其の如く其の如く
り一法儀と一併し其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
西陸一方向の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
アキハ尤強國の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
る士民の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
理とありせんといふ如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
修して解して其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
らして其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

文久三年八月十四日

松平 重三郎

一、日本貿易新聞紙

松平港より

口文三言

水野

板倉

井上

三浦

松平

佐竹

上杉

津波

松平

吾田

日本貿易新聞紙 千八百六十三年九月十六日
即我文久三年八月四日

神奈川開板

今晚水曜日第一時半頃小合衆國に在る館の庭内に有る番兵二人の異人を見掛り其内の異國人一人不意に此番兵に向ひ小銃と打掛り當今の形勢に就て外國人も日本人も罪過と犯すことと戒めんとする時子當り此の如き罪過をなす者ありと云ふ悲むべきことなり ○日本開港以後未だ此の如き大罪は未だ極めて嚴重なる處置を取行ふこと當然たり ○此無法人の主意を番兵を打殺すことにて猶十分ならず候ふべきことを考ふれば實に恐怖すべきこと云ふは是れなり ○小銃を打掛りたる合衆國に在る館に向ひ且其意は近きと以て小銃飛来りて家内の子者中ることと得べし ○然れども此無賴人其主意を遂ぐると得る小銃丸を番兵の中ることなり其後の地

へ打込きたるに實は大きき幸と云ふべし其前夜軍船の
者大聲を發し他を劫したることあり此罪人も全く知る
こと能ざるふあらざれども未だ明白なることあり此度の罪
過及此地まで己の小酌酌の上まで數度乱妨を為せることあり
む此の如き罪過を防ぐ為め小嚴律を立るべし切要なり故に
英吉利米利堅荷蘭三國のコンシユルも十分なる權威にて取
締の仕方を取定めたりと
然れども此港の船を繋げる他國コンシユルも未だ此處置と
行いしと聞かむ

去る日曜日の晩普魯士軍船の舟人日本刀を抜き此地の
旅館に押入り其内子居れる客を斬掛けし皆難なく逃延
いたると以て百乃至二百ドルランの家財を打破りたり○
二三日以前他の普魯士舟人此港の内日本人住居の部にて金

と拵ふことなく日本人店より商買物を取し逃人として以
て大子棒を打たれ傷を蒙り惣身血を染めて異人館
の方へ逃来れり

此諸事皆耻辱たる事にて若し日本人罪を犯せること何
りとも我方を強て之を論ずること能ざるの弱きを生きたり

兩三日以前日本政府の命にて異人館の近傍にありある絶壁の海
岸上子陣所を建てし○此陣所を屯せる兵士は大君に属せる
者なり○月曜日に三百餘人の兵士江戸より来りて東南の本
村海岸を守らんとす○此兵士は外國風を取らざる者と見え
外國の銃を持ち能く順序を齊へたり○此兵士は其以前より太
鼓を打ちハヨ子ツトを付する銃を持指揮官を佩い皆隊を齊
へ進行するに外國人の為驚くべきことなり

近頃江戸港の入口の最狭き所に新に臺場を築きたるに余等以

前水戸一門の者トツバシ當今の大君と退けんと謀れること
と聞くと其後に至て此評判を信することを得たり○
水戸老公猶其子の内一人と真の將軍となさんとほること
謀れるの評判あり○大君京都に在る時當り水戸公其家
に當然たる理に後ひ副大君の任を受く○老公猶之を以
て足れしとほることなく己れの子たる一橋を大君となさん為め
小周旋したり○副大君たる當今の水戸公上文の云ふ所は
後をんといふとも一橋を自ら大君となさん為め當今の
大君を殺害せんと謀り

然きとも大君船を乗りて京都より歸來れるを以て途中にて
之と害せんといふ所の策畧を全く無益とせり○又江戸に歸
來れる後之を毒殺せんとしたれども遂に其謀を得ず老公此
時當り其家と存せんとし爲るべき切腹をふに一若

又然らずんば其領地と保つこと甚だ危うなり○此事を當
今江戸政府みて甚だ心配する所あり

江戸より當港に來れる商人等皆云へらく江戸より當今衆
人の注意する所を戦争の一條にして最早く近日は兵端と
開人とほることの評判あり○國中の人民皆此一事を付
心配するおと多きを以て貿易も夫に準じて繁昌なること
得ず

千八百六十年一月十三日の會合にて決定したる第四及第五
條に後ひ日本 大君領地内に在る英吉利人の平和靜謐
の爲め取極めたる規則

英吉利人の内其名を姓名帳に書載せしむる者又日本大君と
條約を取結ひし諸國の軍船或る其旗の守護を受く商船業

込人たりざる者又も相當なる職掌なく且神奈川コンシエール支配
地を定りたる住居なき者も乞食同様に取扱ふべし故に神奈川に
ある英吉利コンシエール其地を住する相應なる商人又者取締方
役人より此の如き無頼人あるの告知せしむる自ら此者
吟味をべし若し此の如き者ある乞食同様に取扱ふべしと取
極りしきど先づコンシエール領地内に住する貴き英人の内を此
無頼人の受負人と知らんとする者あや否を聞糾し若し受
負人ありし時をコンシエールの命をて此者と一月の間捕置し
其後コンシエールより英吉利軍船又も高船の甲必丹或も指揮
官に慥なる書状を遣し此者を其船より棄せ香港藩属に
送り此地を届きし後是と免れんと當然なり

余此新聞紙と出で以前に諸方より新聞を得しを其内の一は
日本政府より告知せし所より此新聞に従へば寧ろ小笠原を罪を

蒙りて退任を命せられ其他の役人も英吉利より望める^{疑債}賃金と
出せることと付き退役と言付られしと

又當港の奉行浅野備前守も^{疑債}賃金と出せる一件に就き退役を
言付られしとこの評判あり○此人は統て三輩の智人の内
よりて政府の命を反し^{疑債}賃金と出して英吉利と戦争に及ぶことと
妨げしを○然るに昨日外國役人日本政府より浅野を已に退役
と言付たること^{疑債}聞知る○此退役の故を日本政府より言聞
したといふと^{疑債}賃金の一條なること明白なる

他の貴人松平越前守或も此大名の父も小笠原と同様の取扱を
受け閉門と言ふ罰と蒙りたる○此罰の政も外國人への
處置の仕方なるべし

此諸事と考ふれば當今日本にて權威を取る役人を攘夷を好
むること分明なり若し然らざれば此度退役の命を蒙りし人

人最大なる罪過を犯ししと見出されしなり

千八百六十三年九月廿三日 我文久三年八月十一日

神奈川交易新聞第二号

八月十二日に出たる十四号に宰臣小笠原退役の一條を載せしむる。○余亦此新聞紙中と當港の奉行淺野と小笠原の黨たれも退役を命せらるる事と載せしむ。○然るも余が推察は相違なく此奉行の退役「耻辱及ひ刑罰」と日本政府より既に外國全權に告知したり

此二人の退役の故も衆人の穿鑿する所なれども總て日本國の他事件の如く唯推察の事にして明白なるを得ず

總て當港奉行の處置を皆余等も閱れる所なれども此度淺野退役を命せられし故を知ること甚し切要なり。○當年八月五

月の始に淺野の命じて日本人を當港より引取らしめたるを以て日本并に外國人の為に大害を生じ當港を衰へしめ當今余等日々歎息する事件の基を開き之を已前の如く復しむること甚難きに至らしめしむ

横濱交易を此大害より全く復故しむること能はざらん。○日本商人の内一大家の主人たる者の云ふ所を以て日本役人の為せる處置に依る大なる商人皆失望し横濱を近日に必り大衰微とふ。○此説を餘り法外なりといふと近來の如く根子久しく續くことあらは此説を全く虚説と云ふこと能はざらん

又日本人の内は下説を唱ふる者あり曰宰臣小笠原及び奉行淺野を一橋子組し大君に叛きたるを以て罪を蒙りしなりと又一説あり曰く小笠原及び淺野を政府の意思に反し英國に償金を拂ひたるを以て罪を蒙りしなり。○此説を加へて下の説とす者あり小

笠原を外國に挂合ひ又も他の仕方にて外國人を日本より逐放つ
べきの命を蒙りたれども之れに従はん且御門及び大君の望める
所を為さざりて外國人の對し程よく取扱ひたるを以て退役を命
せられしと○余等爰も其他の説を載せることとなさば疑手羊和
ぬむも同人輩の愛する小笠原の退役若し外國一件の故を以て決
て実説と知ること能はざるべし

大君も小笠原の命しる鎖港一條を以て考ふれば大君政府の
外國交易の繁昌かると好むことと信難し

此時に當て外國全権輩の反答に依り先づ鎖港の一條を止めし
つといへども大君御門及び榎夷家も新に他の仕方と考ふこと
明なり○又此新に考ふしる仕方と試むること當今政府并
も権威ある役人の主意たること明なり○是と試みたるに依り
交易大に衰へ近日に全く廢せんとする形勢なり別して重なる

疑輸出 ち体三没

輸書の品物を大に減したり○横濱に送出さんとある租額
江戸まで政府役人の為し留められしを聞くに依り余等如何な
ることと考得るや且其外横濱の交易に加ふる商人を脅し且
殺害ししることあり○此一事を甚しき大切なる事なり○神奈
川へ品物を送出せる商人大坂京都及び江戸を殺されしもの
評判あり又當港に出張せる商人の内二三日以前大に脅され
餘義なく店を閉ち當港より引取り○大なる茶商商人ク
ロヤ、ヤマヤ、ノキヤ等皆此の如し○余等又カムレツ布と
買い或を輸入することを禁むるの命と出たりと聞けども此評
判と妨ぐるの處置を日本國中諸州にせし皆勝手取行ふこ
とと得べし然れども江戸までを政府の承知せしめんとすも猶
氣儘に取行ふと能はざる様なり
明日評判あり曰く大君に属する船阿波の臺場或も中國海濱

の他諸侯の為め大砲を打挂らるりと又播磨國の一諸侯外國人と逐放んが為め毛利大膳大夫一味一と其故を君侯若し之を承知せしめ其臣下皆之を叛くと志しんと以て之を

余等又下の評判を得しを曰く薩摩[島津三郎]を攘夷をせしむ就き大君を援と乞ふりと○然れども余等猶此説を信せしこと能はな

八月十五日譯成

一肥後後為中布告

天朝奉命討伐逆臣等々天下之事至重至難非此不為天朝之儀也

天朝奉命討伐逆臣等々天下之事至重至難非此不為天朝之儀也

天朝奉命討伐逆臣等々天下之事至重至難非此不為天朝之儀也

天朝奉命討伐逆臣等々天下之事至重至難非此不為天朝之儀也

天朝奉命討伐逆臣等々天下之事至重至難非此不為天朝之儀也

天朝奉命討伐逆臣等々天下之事至重至難非此不為天朝之儀也

死方之右内人肥お分四下打部

一 薩州上野郡川上村の嘉悦寺に山形曲成印の如部

一 薩州大野郡志賀の五輪山に依りて日向寺に三印の如部

一 京の路に交りて東の社を多路に及して其の許に依りて

京の路に及りて又して日向寺に印の時馳馬に依りて

一 京の路に及りて

一 土州の如部

一 八月の如部

新皮

京都の如部
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて

京都未状

八月十六日申刻上野郡田到到来

京師八月十七日夜田到到来此地内云云
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて
一 京の路に及りて

一同

八月十七日夜田到到来此地内云云

勤と申、野宮杵尾家、押込殿様と云々叙し、其法は後述也
 関本杵尾家、其の叙し、其の意、此の意、即ち、其の意、其の意、
 長土の子を近集り、右曲と云々の大方生捕、其の意、其の意、
 下合ふし、大角打放し、のりとし、上り、其の意、其の意、
 其代在り、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、

一、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、

一、大坂来状 八日、其の意、其の意、其の意、

當り申、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、
 其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、

一、八日、其の意、其の意、其の意、

其の意、其の意、其の意、

酒并後系次

石守、其の意、其の意、其の意、其の意、

其の意、其の意、其の意、

其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、其の意、

後多事... 八日廿七

大和...

松平...

京都... 仰光

上京...

大久保...

八日廿七

大和...

松平甲...

八日廿七

一肥後... 中川...

一八月... 今内...

一十七... 事...

一十七... 事... 仰光...

多し即免其心之可也

右ノ函於江戸ニ付テハ法皇御遺教ノ御出度御言上ノ御板
命度御降下ノ御感懐甚々徳川家ノ御恩御印ノ御存御由是又
亦御言上ノ御後ノ御事ノ御書御取次ノ御事ノ御成度御事ノ御事
御言上ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
也ト云々ト由右ノ御書ノ御書ノ御書ノ御書ノ御書ノ御書ノ御書
下ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
ト云

一 前条御師ノ御指書ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
ト云

一 七州ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
ト云

一 氏代ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事

以急御取上ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事ノ御事
ト云

相田十郎平
内海多江舟

作 七世多枝
一 山城寺
形 踏石多枝

一 東野より西岸へ山を越して舟に乗る

三三子中洲

唐船中洲

徳大寺中洲

大下分程は、舟内中洲より他出舟に人形舟に乗る
舟内中洲より舟内中洲へ舟内中洲へ舟内中洲へ
舟内中洲へ舟内中洲へ

一 舟内中洲より舟内中洲へ舟内中洲へ

舟内中洲

舟内中洲より舟内中洲へ舟内中洲へ
舟内中洲より舟内中洲へ舟内中洲へ
舟内中洲より舟内中洲へ舟内中洲へ
舟内中洲より舟内中洲へ舟内中洲へ

舟内中洲

一月廿九日初七册多矣、初便七册八册之中、以神卷、
一長洲付子九物大石并法圖、若石按内、後書云、
中如、委回、各一、各一、信、信、信、信、信、

初平甲申文書
三、三、三、三、三、
其、其、其、其、其、

右大和系之件、有、有、有、有、有、

一月十八日大坂市代、

一月十八日、

外美掃拂之儀、
領法書中、
厚之、
積尤、
移、
係、
子、
並、
言、
初、
功、
外、

在事五年其功績著矣予予之

一 八月廿九日

洋書調子係開成所上

大書

一 日

不主內 申書

大書

大書

一 井上河内

中山大綱

馬具

去又

控

不

七

大

一 日

今

夫

斗

應

不得其業 應了月取表の事 亦不取入 其内分は先時國表
に上るし 法事 亦不取入 其内分は先時國表
其後 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表
其内 亦不取入 其内分は先時國表

阿比事相中將友も用百途中 中用令津兵士三千人 以て是を
内とて議費漫及に 仰付是交三つとて國難退に 有議表格取
仰付其外正親町大納言庭田中納言華室左右弁宰相以上係費加
勢相 御前とて中川宮始に公之并肥後守長門守上板原
正大納言正一守長州野分之心を以て不客易奸謀相巧に
御親征 行幸中押上御勅より由肥後守頻りに中川宮始に同
心とて彈正大納言尤同とて專長州と野分と仰付成就に先
不取入長州は先人教悉皆引拂はれし知此時尚閑白殿中
名も亦之此時に玉柳系中納言及閑白殿中 法勅使に
仰付是來之如紙に 閑白殿中推亦不向に在
存り得ず 諸藩能事の如き言 地集はる雨に 亦不取入
人々衆入不取入の 御沙汰一端 命得難に成於長州何れは疑
惑有るに 亦不取入命閑白殿中 詰問し之如紙殿下し 命に

事實何在不并は若くは在るは得て禁門奉入之儀持家官より
其儀を拒むるは成方無き事なり國公取立御事跡より其部臣に於
親告し是又奉入難き成り同日は用掛より三多取下推系法高
親告
見及尚書深か子細如何に控申回ふ事柄何在不并其上
不意持家之儀 仰付何事し不能申上り申上り親告同日
悉礼二儀精忠之三多取何事し不并其儀は得て押下取
下は推系子細如何に控申回ふ事柄何在不并其上
推系此時分 勅使関白殿より奉命 勅使尚侍は取
下系 内直、 御前より召 勅使 仰付申上り其後別紙
通す 仰出
表秋 御親正之儀奉命其儀令事にて 教書より 御出給
施行は奉命全 思召不并 其儀は 御親正之儀
其儀は先此方更に 仰付は控申表 教書より不并

為抄 川幸路御三河 仰出筆 一日十六

相長州遠慮免之方再石所由一處不伏依之柳系中助及
長官、 勅使は仰付より毛利源次吉川監物坊田重介が
至るは河邊 勅使は侍交中より極意に受命今此河邊に
儀成重し迷惑之方吉川重田より立上り其儀は控申の取
立 勅使侍交の儀は是無任柳系殿より仰
攘夷 御親正之儀是 教書より 有降を 川幸
其儀は疎暴之知置有るは取申取調有 有攘夷之儀
其何因に 教書確乎なる 有筆在長州効力
朝家より人々拒無之筆 向後亦 御侍預 只今問
忠節可成るは蒲中多人教之儀は其儀は疎暴之儀は勅
其可成るは 仰下筆
勅使は仰下演説より其儀は疎暴之儀は其儀は自然に申

元孫礼亦生以之深之涵 宿禰の身押人教引はる
は役侍りより安吉川里物に在りて人より疎蒙馳礼を
人侍交り無き方種に政若許り侍り何分人教其侍り
不より安 宿禰の身押人 勅意道奉り依り利解
は請り上之次之系及姑中外之像等々不堪出款何年
是死也 法各之方解り根に安款願中之

勅書之類幸由公の如度所之伺之儀之為るは座が不承
知り侍り也 小幸おの依既は成定相成に像忠勤人
望しよりふに二系殿と始有志公之方不所 弗徳書
子且又塚町はつは志と多除服方は所請と通路も
由其外は門に通路留之所は法に成殊人教は多分
入請安之也 仰付彼是之は控根不承也 朝廷
は一大事と事存りて圓白取下之系殿信九重内之根

子不承之儀は増々万一誰心得像しとては侍り御座度道
弗得之儀仕度寸減之也 家中一統疎蒙之儀業侍者
三度存此段深遠亮亦成下二系殿を始速は渡藏
為立其外法事 如尋常 弗は法に 仰付根存也
右之道は之書及出此時之助は後諸令之者士長州人
数お屯の上之隊伍お立大破亦長藩人数は向先向而令
亦立形勢亦吉川是田亦何は長藩とお手は不穩勢と示
以て依之是一藩不堪在番 勅使上之儀は柳原
下知は後令亦番之向先と亦向は之也 其上は長藩人教
引拂是而根 勅命は亦立の身所請之上は右に引拂は
長州は之也 遣人教引拂は 勅使歸系三
系中納言及以下は此時 勅使清水谷言相中將及之犯
禁殿下は推系は亦不容易速に退教無之は人全道 勅

至如言、仁孝此後三事殿以下長州人數、古文如法院宮、
是道散親兵多人、却是又隨侍、妙門、奉皇此時既、黃
昏及深更、波瀾之上、蓋田七、介、殿下、

勅書被、仰下、欲願、
別奉、通、
叶、
以、
之、
思、
力、
是、
間、

八月
長門宰相内
蓋田七、介

右、通書、付、出、四、更、前、追、伏、見、出、立、於、親、兵、之、隨、侍、
像、中、立、以、得、其、三、系、殿、
臣、之、親、兵、之、和、臣、之、尚、
引、退、は、親、兵、之、和、臣、之、親、兵、之、退、散、之、由、其、内、和、相、
相、庭、之、不、相、守、依、之、
内、之、里、之、
妙、門、之、
始、三、系、殿、之、和、臣、之、上、道、
中、立、以、得、其、
朝、議、何、世、不、有、改、也、之、事、

已上十八日、十九日、若、言、之、事、實、也、

二月廿日

長谷山主

曾益 桑名坂

駒場野代 木王

越中 清浦 鎌持

大橋

新庄

村根田

松平 飛騨守

池田 信濃守

柳 氏 新三郎

松平 助十郎

松平 為忠守

稻 葉 右衛門

伊 豆 守 孫守

津 藤 式部 少輔

水 野 肥 前守

内 倉 金 守

松平 依 後守

松平 能 宣守

中川口

市川 辰

千位 宿

下板 橋

細 橋

赤 橋

赤 羽 根

品 川

古 玉 橋

岩 田 吉 守 守 又

織 田 兵 部 少 輔

酒 井 大 三 郎

高 尾 理 三 郎

森 川 内 膳 正

西 川 大 和 守

毛 利 伊 勢 守

片 桐 貞 孫 正

伊 豆 守 孫 守

桑 名 大 膳 守

松 平 山 崎 守

堀 田 三 四 郎

井 上 龍 孫 守

言信之... 内... 且... 松... 不... 若... 友... 信... 信... 事...

一... 浪... 害... 新... 一... 信... 事...

右... 并... 在... 已... 區... 似... 傷... 上... 日... 為... 人... 致... 之... 處... 出... 於... 下... 身...

一... 言... 子... 小... 傳... 只... 何... 掃... 劫... 後... 下... 身... 部... 以... 上...

別... 林... 程... 而... 別... 是... 聖... 化... 內... 亦... 信... 亦... 不... 斗... 人... 致... 之... 處... 出... 於... 下... 身... 部... 以... 上...

一八五五の夜所傳代松平伊喜候より庄屋花屋辰兵衛宛に書付候事
通す也

此庄平書付の由より其旨又も其旨と見給力と持付流土作
之旨に達し河内修善寺(和州)赤松氏代官陣向に訊入致意と云々
其旨及叔火より其旨不審易く不審止り向付不審に相平申渡すと
始末より其旨不審事と云々申渡すと云々不審に相平申渡すと
此方より其旨不審事と云々申渡すと云々不審に相平申渡すと
去々其旨不審事と云々申渡すと云々不審に相平申渡すと
事申合致候事と云々申渡すと云々不審に相平申渡すと
其旨不審事と云々申渡すと云々不審に相平申渡すと
云々不審に相平申渡すと云々不審に相平申渡すと

右庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

要可なり取用下さる也

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛
此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

此庄屋辰兵衛辰兵衛先手人致し書付候事
庄屋辰兵衛辰兵衛

六つ竹を多量に山に伐採し、出た竹を首に掛ける。此竹は、
 大目 九挺
 鏡 数石
 首の皮打 口
 竹洗 十三挺
 生捕 数石
 首九つ 七人

一 高坂寺

寺の境内に晩七の夜、此寺の境内に、
 日向の月圓を、
 杖は、
 寺の境内に、
 此寺の境内に、

一 雜衣首	七	一 生捕	寺人
一 大同	六挺	一 小角	寺六挺
	必至目六打、寺十寺、寺	一 鏡	九石
一 陣多杖	一 刀	一 弓	指五本
一 服多	三平九平	一 具足	砂張
一 兜	一	一 高張能灯	寺領
一 陣笠	五平六	一 法杖	一
一 玉系草首	二高		三杖

寺の境内に、
 寺の境内に、
 寺の境内に、
 寺の境内に、

九月二日

寺の境内に、
 寺の境内に、

一九日方日本橋桐千日左邊道松橋板。江蘇集法身云々

示女吏

九月二日

神國有志連

近來醜虜恣猖獗未價泝騰萬民欲墜塗炭如霸府
女吏田村肥後守首而張異說所謂偷一日之安忘百載之
憂予雖在草莽深憂之故前古欲抽誠祈之鎌倉八幡
神前余而遇醜夷不堪憂憤之至戮之以效勵因循苟安
浸潤游惰之輩而耳矣

同所日因法身云々

女吏云々云々

神物之天也云々其日幕府之憂夫何論其所以其飛不
可入天地早之改人心不效於云々不り云々天誅云々也

一編井田後云々書行

先子云々書云々書云々通即親兵云々知云々 所新表
上云先月云々三條中助云々云々法云々云々云々云々
通云云云云此其局也云々

編井田後云々

別紙

志云云云志云云云志云云云 志云云云
所滿云々 志云云云云云 志云云云

七月

一八月云云河波通七條云々金光寺表云々首一云々云々
板云々

あ編大信命

云々云々山代管石神云々云々云々云々云々云々

終と云ふ人民と云ふ一免重はる者たると之に改行ん其能中万性
世詳分難思之其由者乃不客易此言は其能中其能中其能中
人人難有之其能中其能中其能中其能中其能中其能中其能中
天誅如此今を幸自之の

亥八月三日

一京師の越前福井と云ふ所は福書

今取 朝敵松平春勝は押上京師に在り不届玉穂は右
越前道中、松平春勝は因に之者止る所は勿論人馬は之を政
一と云ふ加天誅は其能中其能中其能中其能中其能中其能中其能中

亥八月七日

右道幸甚遠常刻附之取前福井と云ふ能中事

尾系部

天印書は其能中

江永新之印

前田孝之印

野原長之印

日下門前

学修所

而了回中

一八月七日行系部は乃今度獲美 卯新能大和國 川草

神武奉山後春乃社中 卯詳略 卯遠為其上 卯宮

行者の 仁由し

一神使見世代古石印を其能中其能中其能中其能中其能中其能中其能中
何者不知其能中其能中其能中其能中其能中其能中其能中

稻葉寺の歴史
田圃の中

古くは三河の東に別荘ありて其の内に寺ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に

一 水野寺の歴史

水野寺は東海道の宿場市にありて其の寺に田圃ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に

田圃の歴史は古くは其の寺にありて其の寺に田圃ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に

八十八

水野寺の歴史

別紙

田圃の歴史は古くは其の寺にありて其の寺に田圃ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に
田圃ありて其の田圃に寺ありて其の寺に田圃ありて其の寺に

有書像為紙其力仕存何信其不其方其方人
就紙紙法自其神人其其其其其其其其其其
像其其其其其其其其其其其其其其其其其
不其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其
此其其其其其其其其其其其其其其其其其

此其其其其其其其其其其其其其其其其其

別紙

此其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其

右此其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

資宗

寶順

以只其其 由他其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其其其其其

一其其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

定印
雅典

因幡中將及

別紙

去六月廿九日朝臣之儀不終在之儀一以有山東七人
川山也了交數分不之即差事之山有年七月廿日官松平或松平
出府之使何 天氣定事之初前件所催使と 何也之先
因傷事之出之儀也 又之(近事) 去獲事之成切
所何也之事

別紙

今收得奉給印之儀 何也之儀在控獲事了之儀也
切思年之 報名之儀之勤 王之儀不待奉府之
台布未了之採獲之儀 報名之儀之儀也

一付差事公而月代(上中事)

京都所用之由法士教十人河州林山之古裁之何意在也

信國之 何也之儀一切事了之儀也 何也之儀也 何也之儀也
乃他地之 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也
乃他地之 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也

八月廿日

右之通日仍之為侍下之入名之何也之儀也 何也之儀也
右之通日仍之為侍下之入名之何也之儀也 何也之儀也
右之通日仍之為侍下之入名之何也之儀也 何也之儀也

一加後神平之儀也 何也之儀也

此中今晚在系表所所定不夜風報 何也之儀也 何也之儀也
乃他地之 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也
乃他地之 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也 何也之儀也

私儀之教運之由申 古事出之此後局中

如藤抄中

一 田部等古事書

昨中分脱之時 所請言大徳堂院跡 變仍不極松子可
益事之旨書持留而古人教釋中 此後私儀色は用申之旨
内中系 而少信之旨松平肥後守及今迄之旨 其後系 内中
古儀多之旨又信之旨 別紙之旨 其後之旨 其後之旨
教交代古事書 所請之此古事書 之旨

戸田等古事

別紙

甚高之古事何れも私儀之旨力に依て古事 其後古事法局

五十年前古事書 之旨

世後高法切之旨 教渡り方今交代法之旨 之旨

一本多古事書

先度局中 此度私州新州 幸寺而用之 古事私儀之旨

古事之旨 傳奏野宮等事 將及之旨 信守之旨 以上系以古事

如古事古事書 而所物縁之旨 見申之旨 松平肥後守之旨

信守之旨 心申之旨 内中系 信守之旨 内中系 信守之旨

信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨

信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨

信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨

信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨

信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨 信守之旨

古事古事書

別紙

甚高之古事何れも私儀之旨力に依て古事 其後古事法局

宜修教之在乃力了之書

此修為法切之古人教應節乃乃今之代也其書下以之也

一 松平甲斐守書

若夫日京師也其代稱業也乃也私家身之者其存出在月二系
而博也其書也一信守之家事之者其出教事之者其出乃也
而博也乃人教事之信守之者其出乃也其出乃也其出乃也
而博也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也

乃乃其書也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也

右之通書也乃乃其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也

一 乃乃其書也

松平甲斐守

一 毛利漢政書

私係先般也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也

一 乃乃其書也

毛利漢政書

一 吉川學物書

私係先般也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也

一 乃乃其書也

吉川學物

一 祇園社門前張紙

新皮信曰 此張紙祇園社內之張紙其書也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也其出乃也

上若國陋頑愚不知遵奉推戴之大義矣欲恣凶暴怨力微
不能遂素志近者賴逆賊之薩人之大小少陰奉 朝廷逞暴

松平肥後守

尤使排係... 少... 手... 一...

松平信房

當希... 向... 了...

松平七郎

日文

當不見... 松平信房

松平信房

日文

當不見... 松平信房

仙石德政

日文

當不見... 松平信房

松平信房

京都... 左...

一...

由... 以...

飛... 河...

一...

...

内海の飛鳥二六の鳥類

口より鳥類

口より鳥類

口より鳥類

松平御子あり

松平おねあり

松平大和あり

松平右系元

七月廿二日 松平御子あり

八月廿二日 松平御子あり

松平右系元

松平御子あり

松平御子あり

松平御子あり

松平御子あり

松平御子あり

松平御子あり

松平御子あり

松平御子あり

口より

松平御子あり

口より

松平御子あり

松平御子あり

一

松平忠定

安達源左衛門

池田信俊

細川左和

毛利伊左衛門

稻葉吉重

信長

同
同
同
同
同

何處

實善及之後立公儀未納御覽也

松平忠定

此書為松平忠定所撰其書之旨在於信長之御指圖也其書之旨在於
而久之方之曰其書

一

松平甲斐守

此書係甲斐守所撰其書之旨在於松平忠定之御指圖也其書之旨在於
松平忠定之御指圖也其書之旨在於
松平忠定之御指圖也其書之旨在於

石中色其為院

松村出羽守

日文云

松平甲斐守

此書係松村出羽守所撰其書之旨在於松平甲斐守之御指圖也其書之旨在於
松平甲斐守之御指圖也其書之旨在於
松平甲斐守之御指圖也其書之旨在於

五乘之成古而礼以辨其地也人上其为国也後并考之
陣上定之所取抄命其共又其呼出河能之礼也名尤人
此乘之受以河能其右人其酒能下其上也科令千之
之其能下也且十九之祝其肆首也其西河能河能
庭燒排也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

山崎九十九

割紙

- 一 弓矢
- 一 鉄砲
- 一 馬
- 二 紙
- 二 籠
- 一 籠

古此市 仰視西身人取仰俯候為而出張也其取信用

山崎九十九

一 柱村路内の中

寺中分中山山侍候使者由之五人百連和州之取在候
抄命之送之也其大和の事也 神宮上川事各路河路
下其動分漢書其也其其上其也其也其也其也其也其也
連省也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
下其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
分是也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
後悔行有封 其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

三原為瑞舍之必此其若居士遊揚方之
其又予亦如之乎此經之為之也 昔者有之 此經之為之也 而此意
予亦知之也

一 杜村路何事亦年多新也

杜村路何事亦年多新也
子川也也

元

三原如何事亦年多新也

一 杜村路何事亦年多新也

中山家公等之由浪士相交之後人斗其是也 按可流也 其後河石
杜山山家相傳子陣至其卯年 初年上信或見之也 亦信之而右
礼妨者 恐防方庭重致子能也 其後切控也 其後信之也
古之也 其後之可代物業也 其後之也 其後之也 其後之也
其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也

一 杜村路何事亦年多新也

杜村路何事亦年多新也
山也也

一 杜村路何事亦年多新也

別紙之通者十九日大坂所傳代杜年伊是也 其後之也 其後之也 其後之也
其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也

一 杜村路何事亦年多新也

杜村路何事亦年多新也
兒也也

別紙

外美掃樓之傳者其法高下 其後之也 其後之也 其後之也
其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也
其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也
其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也
其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也
其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也 其後之也



